

IV-6

多発性骨髓腫における診断時骨髓異形成と治療経過に関する検討

奥田慎也、平井理泉、寺迫桐子、竹之内礼子、川畑公人、谷村 聡、田中 勝、萩原将太郎、三輪哲義

国立国際医療センター血液内科

[目的] 骨髓腫(MM)では、血清 2MG , Alb 値等の検査値に加え、MM 細胞形態も幹細胞移植群で有意な予後因子とされている。造血器腫瘍では、腫瘍以外の細胞の形態異常(myelodysplasia=mds)が時に観察される。AML with tri-lineage myelodysplasia は予後不良であるが、MM の mds の予後因子としての意義は不明である。今回、MM 症例の治療前 mds の意義を解析した(他院からの既治療・紹介症例は原則除外)。**[対象]** 2000 年 4 月～2005 年 7 月に auto-PBSCH/PBSCT を目指した VAD 施行例(MM 24 例, 診断時年齢:45-68 歳, 男/女=9/15 例, M 蛋白: IgG/A/D/BJP=16/5/1/5 例, DS 病期(診断時): / / =3/7/15 例, ISS:1/2/3=15/7/3 例 **[方法]** 診断時骨髓像で、骨髓腫細胞 100 個・巨核球 5 個・他の有核細胞 200 個以上を鏡検し、3 系統の mds(pseudo-Pelger anomaly, dyserythropoiesis, separated nuclei in MgK 等)の有無を判定。mds と診断時・経過中の血算・生化学・血清各検査値との関連、mds と PBSCH 効率・治療効果・生存期間との関連を解析(生存率検定, t 検定, クロス表解析等)。**[結果]** mds:+/-=21/4 例, 顆粒球系異形成は予後因子ではないが感染合併例が多く、dose-intensity が不十分であった。赤芽球系異形成の一部は予後因子であった(Howell-Jolly 小体の有無 $P=0.003$)。**[結論]** MM では、診断時 mds が PBSCT 施行群(intent-to-treat 解析)で、有意な予後因子である可能性が示唆された。MMMDS(multiple myeloma with myelodysplasia)の clinical entity としての意義に関し、多数例での解析が望まれる。